

家庭の食事からの放射性物質摂取量調査 2016年度の結果

2011年に福島原発事故が発生し、当時、飛散した放射性物質の影響が心配されました。行政をはじめ様々な研究機関などから検査結果が公表されましたが、私たちの食事そのものの結果ではなく、安心につながるものではありませんでした。

そこで、日本生活協同組合連合会(以下:日生協)が中心となり、全国の組合員の協力を得て実際の食事を測定する取り組みを進めました。

今回は、6回目となった2016年度の結果と食品中の放射性物質の健康影響についてお知らせします。

● 摂取量調査とはどんな検査?

東北・関東を中心に、実際の食事そのものを2日分用意していただき、その食事の放射性物質を測定することで1日当りの放射性物質の摂取量を調査します。

全国で約250世帯の組合員の協力を得て、全国の生協の7つの検査施設(東海コープの商品検査センター含む)で測定しました。250世帯の中には東海三県の組合員9名も含まれています。

最も厳しい飲料水の基準である10ベクレルに対してその1/10になる1ベクレル以上を測定できるようにしています。

厚労省が設定した放射性セシウムの基準値と摂取量調査の検出限界の比較

食品群	基準値(ベクレル)
一般食品	100
乳児用食品	50
牛乳	50
飲料水	10
摂取量調査の検出限界	1

● 2016年度の結果は?

全ての食事から放射性物質の検出はありませんでした。私たちが実際に食べているものは、放射性物質がほとんど残留していない状況である事が良くわかりました。

● これまでの結果から

2011年度から続けているこの調査では、検出される食事の数も検出される放射性物質の量も年々少なくなり、2014年度からはすべての地域で検出されない状況が続いています。

事故自体は解決したわけではありませんが、少なくとも放射性物質の拡散は私たちの生活を脅かすことがないレベルで管理されています。

放射性物質と聞くと、どうしても気になります。この調査の中で最も放射性物質がたくさん残っていた食事を仮に一年間ずっと食べ続けたとしても、その影響は東京とニューヨークを飛行機でわずか1回往復した時の宇宙線からの被ばく量と変わりません。放射線からの影響はゼロではありませんが、普通の生活の範囲で受ける影響と大きくは変わらないと考えると安心できそうですね。

2017年
8月3週
(33号)

東海コープからの

おいしくって、安全なおはなし

